

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑬

土肥いつき

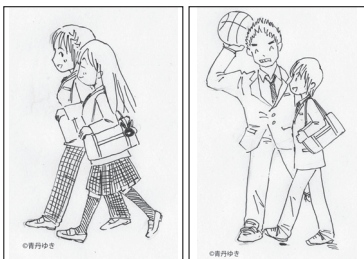
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

多様性ワークショップの可能性

前号では、「多様性ワークショップ」の紹介をしたあと、カードの使い方の例として「左利き／右利き」をとりあげ、「多数者向けの社会が少数者に不便を強いていることが可視化される」ことを示しました。今号は、カードのさまざまな使い方について書くことにします。

実は、「左利き／右利き」のカードは他の使い方できます。例えば、野球というシチュエーションを考えると、左利きの選手は少数であるがゆえに有利になるケースがあります。つまり、少数者は、シチュエーション次第では少数であることによって優位性を持つこともあるということがわかります。そのことを通して、少数者が多数者になればいいのではなく、少数者が少数者として尊重される社会こそが豊かな社会であることが伝えられます。

下のような「女子ふたり」「男子ふたり」のイラストが



両面に描いてあるカードがあります。これは「女子／男子」のカードです。ちなみに、奥の女子はスラックスをはいています。

このカードはもちろんジェンダーについてのカードです。このカードで伝えたいことは、「マジョリティ／マイノリティは人数の問題ではなく、社会においてパワーを持つ存在か、それを奪われている存在かということである」ということです。生徒たちは「左利き／右利き」のカードのように「マイノリティ＝人数が少ない」と考えがちです。しかし、権利の不平等はパワーのアンバランスです。そのことをこのカードで伝えたいと考えています。

さらにジェンダー不平等を説明するために便宜的にカードの両面に「女子／男子」としてありますが、ほんとうはふたつにわけられないことや、「誰が女子／男子なのか」という問いかけからジェンダーアイデンティティのことまで話を膨らませることができます。

カードの中には「市内出身／市外出身」というカー

ドがあります。このカードそのものはなんの不平等も生み出しません。しかし、それが「部落出身／部落外出身」となると、話はまったく変わります。このように、生まれた場所やルーツによる差別もあるということが可視化することもできます。

さらに、生徒に配布しないオプションカードをつくることもできます。例えば、リオオリンピックでは公開プロポーズが大流行しました。特に、飛び込みの女性選手への男性選手によるプロポーズは、その賛否も含め大きな話題になりました。一方、7人制ラグビーの会場でもレズビアンカップルの公開プロポーズがありました。これらの写真をカードの両面に貼り「ともにプロポーズをしているが、日本においては異性愛は法的に認められるが同性愛は法的に認められていない」という問いかけもできます。このことを通して、人々の意識が変わるだけでは問題は解決しないということを伝えることができます。

わたしは興侶選手と李選手というふたりのサッカー選手の写真をカードの両面に貼ったオプションカードを使います。ふたりはともにストライカーで、2014年当時ともに浦和レッズに所属していました。その2014年、いわゆる「浦和レッズ差別横断幕事件」が起きました。同じアスリートでも国籍や民族という1枚のカードでヘイトスピーチの対象にされてしまうということを通して、差別は「人」を見ずに、属性に対しておこなわれるということを伝えられます。

このように、多様性ワークショップはアレンジを加えることで、さまざまな問いかけをすることが可能となります。また後日、カードで提示した内容について学習する際、「前にやったよね」というふうな「前フリ」に使うこともできます。あるいは、例えばジェンダーのカードにあわせて労働力率や賃金格差などのカードをつくれれば、ジェンダー不平等について学習する時の導入として使うこともできます。

次号では、このワークを思いついた経緯について書くことにします。